

## マハティール首相のヴァチカン訪問顛末記

綱島(三宅)郁子

2002年6月7日、マレーシア史上初の会談がローマ教皇庁で実現した。マハティール首相が、教皇ヨハネ・パウロ二世の招待に応じ、スイス、ルクセンブルク歴訪の一環として、ヴァチカン<sup>1</sup>を訪問したのである。

### 際立ったムスリム指導者側の反応

カトリック教会の最高位にある教皇からマレーシア首相宛に、ヴァチカンへの招待通知が届くや否や、与野党各代表者およびカトリック関係者や仏教指導者など各界の意見表明は、マスメディアで連日にぎやかに報道された<sup>2</sup>。名誉なことだと誇らしそうな様子をインターネットで眺めつ

つ、キリスト教側の社会的不平不満を長年聞き慣れていた筆者は、いささか違和感を覚えた。自国の現首相がカトリック総本山に公式招待されたことを大歓迎するのは、本来カトリック共同体のはずである。しかし、ネット上の電子記事から受けた感触では、当事者であるカトリック信者達よりも、ムスリム指導者の方がうれしそうに張り切っていた。実際のところ、非マレー人で構成されているカトリック共同体の喜びの声は、ムスリム指導者層の興奮にかき消されてしまったのかもしれない。

ヴァチカンの招待を断るべきだという意見は、少なくとも公的には、非カトリックの政治家や宗教者いずれの立場からも一切出されなかった模様である<sup>3</sup>。それどころかムスリム指導者は「非ムスリムからの招待に応じるのは、イスラームでは禁じられていない」<sup>4</sup>と肯定的に支持し、「これはダッワでもある。ローマ・カトリック教会の最高指導者に、イスラームはテロ宗教ではないことと、真のイスラームの教えを、首相はこの際よく説明すべきだ」<sup>5</sup>

<sup>1</sup> 2003年1月の時点で、日本国外務省は、ヴァチカン市国を次のように説明する。「国名：ヴァチカン市国 (State of the City of Vatican) ヴァチカンとは、法皇を国家元首とする独立国家たるヴァチカン市国と、法皇を首長として世界のカトリック教会を支配する法王聖座(Holy See)の聖俗両面の総称」「外交目標は、キリスト教精神を基調とする正義に基づく世界平和の確立、人心道義の昂揚にある。そのための武力紛争の回避、人種的差別の廃止と人権の確立、発展途上国に対する精神的・物理的援助等、もっぱら人道的立場による平和提唱がヴァチカン外交の特色である。」なお、日本のメディアでは「ローマ法王」の通称が用いられるが、カトリック教会の用語では「教皇」である。外務省は折衷式の「法皇」(仏教に帰依した上皇)と通称「法王」の両方を採用しているが、その理由は不明である。本稿では、外務省文脈とカトリック文脈を区別した上で、「法王」「教皇」の二つの呼称を併用する。

<sup>2</sup> 2002年5月25日から6月6日までのブルナマ通信(Bernama)、スター紙(The Star)、ウトゥサン・マレーシア紙(Utusan Malaysia)(英語・マレー語)の計23件のウェブサイト記事を指す。

<sup>3</sup> ただし、プロテスタント側のコメントは不明である。恐らく、国民として反対する理由はないものの、キリスト教内部の歴史上の教派的神学的相違から、表立った意思も示せないという事情が絡んでいるのだろうと思われる。

<sup>4</sup> 総理府大臣 Datuk Abdul Hamid Zainal Abidin の発言(Bernama, 25 May, 2002“Islam Does Not Prevent Dialogue With Non-Muslims”)。クランタン州知事 Datuk Nik Abdul Aziz Nik Mat は、地元の仏教寺院を二度訪れたりタイの仏教代表と会ったりした自分の経験を引用して賛同した(Bernama, 27 May, 2002, Utusan Malaysia, 27 Mei, 2002)。

<sup>5</sup> ヌグリ・スンビラン州知事 Tan Sri Mohamed Isa

と積極的な姿勢を見せた。ムスリム側に共通するのは、「イスラーム界では、それほど多くの指導者が教皇に会う機会があるわけではない」「教皇が首相を招待したのは、マレーシアが認知されたことを意味し、首相が、国際的な指導者かつムスリム界のリーダーであることが認められたということだ」と意気込んでいることだった<sup>6</sup>。

何となくかみ合っていない感のする反応だと筆者は思った。

第一に、世界的に多大な影響力を持つ立場からの招待を、一国を代表する首相がさしたる理由もなく断るならば、よほど孤立した閉鎖国家でもない限り、礼節上深刻な意味を持つだろう。マハティール氏は、国益に適うと見て取るや、颯爽と国境を越えて精力的に外交を展開するタイプの政治家である<sup>7</sup>。

---

Abdul Samad の発言(Bernama 26 May, 2002, Utusan Malaysia, 26 May, 2002)。

<sup>6</sup> 汎マレーシア・イスラーム党(PAS) 会長 Datuk Fadzil Noor のみ、2002年1月にアメリカ合衆国で発覚した少なからぬ数のカトリック司祭による未成年者への性的虐待を種に、「厄介な人と会うのだなあ」と皮肉っぽく述べたと報じられた(Asia Times, 7 June, 2002)。この発言は、マハティール首相がその昔、ケダ州で Fadzil Noor 氏のよき家庭医だったという個人関係を考慮する必要がある。また、キリスト教関係者の倫理低下に対するムスリム指導者からの警鐘とも解せよう。この後6月23日に、氏は心臓病のため逝去した。

<sup>7</sup> この年には、ロンドンでブレア首相(2月26日)、モスクワでプーチン大統領(3月16日)、ホワイトハウスでブッシュ大統領(5月15日)、東京で小泉首相(5月21日)、ソウルで金大中大統領(5月23日)と相次いで会談している。マレー人の心情に立てば、米国同時多発テロ事件発生後、マハティール首相が各国の政治家と続けざまに面会し、マレーシアや穏健ムスリムの立場について熱弁をふるっているために、教皇も「我が国のヒーロー」と会いたがったのだと思ったとしても

第二に、マレーシアのキリスト教諸派で最大人口を有するカトリック教会は<sup>8</sup>、中国と異なり、公式外交こそ樹立されていないもののローマ教皇庁と正常な関係にある<sup>9</sup>。例えば、カトリック・リサーチセンターの主力研究員だった華人司祭が、現在はローマに配属されていると聞く<sup>10</sup>。想像するに、報告書なども定期的にヴァチカンへ提出されていることだろう。その一証拠として、1980年代の州法・州法案のいわゆる語彙リスト問題の際、カトリック側はヴァチカンに相談し、指示を仰いでいたのである<sup>11</sup>。また、憶測に過ぎないが、MCCBCHS が2002年1月31日に公表した「信教の自由および宗教や信仰に基づく非寛容や差別の排除に関する宣言」<sup>12</sup>も、現会長がカト

---

無理はないだろう。

<sup>8</sup> 正確なカトリック人口数は、統計によって異なる。約60万人(Bernama, 7 June, 2002)、70万人(Union of Catholic Asian News, July 2002, Hong Kong)、72万1889人(World Christian Encyclopedia, 2nd edition, Oxford University Press, 2001, p.474)、75万875人(The Official 2002 Catholic Directory and Ordo of Singapore, Malaysia, Brunei, The Catholic News Office, Singapore)と相当な差異が見られる。

<sup>9</sup> Herald (The Catholic Fortnightly), 5 November, 2000 (Vol.7, No.22) p.1. 拙稿「クアラルンプール大司教表敬訪問記」『JAMS News』(2001.9) No.21, p.24. 椅子にかけた教皇を前に跪いた大司教の写真が、恭順関係を反映している。

<sup>10</sup> (追記) 2003年2月13日、この司祭はマラッカ・ジョホール司教に任命された。ローマ滞在は計10年だった。

<sup>11</sup> ヴァチカンの助言は「当局に対して、学問的根拠を示したらどうだろうか」というものであった。これが功奏せず、結局、州法・州法案可決へと至った経緯については、2002年2月JAMS総会の筆者報告で紹介済みである。

<sup>12</sup> 拙稿「マレーシアはイスラーム国家なのか? マハティール発言をめぐるキリスト教指導者の反応

リック・クアラルンプール大司教である以上、恐らくはヴァチカン側に届いているのではないだろうか。

第三に、世界に広がるカトリック教会は、1962年から65年の第二ヴァチカン公会議で、イスラームとの関わりについても既に言及している<sup>13</sup>。学問修道会司祭が、心を砕いてイスラーム研究に専念しているという事実、また、ムスリムから尊敬されているカトリック司祭も皆無ではないという現実を、どのように理解しているのだろうか。

第四に、2001年9月11日の米国同時多発テロ事件発生後、教皇は直ちに平和を求める祈りと説教を行なった<sup>14</sup>。テロ問題の本質に関して、

---

」『JAMS News』(2002.10.31) No.24, p.9.

<sup>13</sup> 「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言」(1965年10月28日 司教パウルス)は、以下のように述べる。「教会はイスラム教徒をも尊重する。(中略)諸世紀にわたる時代の流れにおいて、キリスト教徒とイスラム教徒の間に少なからざる不和と敵意が生じたが、聖なる教会会議は、すべての人に過ぎ去ったことを忘れ、互いに理解し合うよう、まじめに努力し、また社会正義、道徳的善、さらに平和と自由を、すべての人のために共同で守り、促進するよう勧告する。」(南山大学監修『第2バチカン公会議 公文書全集』中央出版社(1986) p.198) (Declaration on the Relation of the Church to non-Christian Religions NOSTRA AETATE, Proclaimed by His Holiness Pope Paul on October 28, 1965. 3. The Church regards with esteem also the Moslems.(.....) Since in the course of centuries not a few quarrels and hostilities have arisen between Christians and Moslems, this sacred synod urges all to forget the past and to work sincerely for mutual understanding and to preserve as well as to promote together for the benefit of all mankind social justice and moral welfare, as well as peace and freedom.)

<sup>14</sup> 2001年9月12日午前10時に始まった聖ペトロ広場での定例謁見説教。

イスラームとは峻別されなければならないとインシアティヴをとったのは、むしろカトリック側なのである<sup>15</sup>。

#### 会談の様相 国内一般メディアとカトリックメディアの対比

当日は、ローマ時刻の午前11時(マレーシア時刻午後5時)に、面会が設定された<sup>16</sup>。

教皇の書斎における懇談は10分間で、引き続きマハティール首相夫妻と随行代表団は<sup>17</sup>、国務長官 Angelo Sodano 枢機卿や外務担当長官 Jean-Louis Tauran 大司教と会談した<sup>18</sup>。

外交には機密事項がつきもので、談話詳細のすべてが公にされたとは言い難いが、本件においても、マレーシア向け首相発言とカトリックメディアの報道は、かなりの相違を示した。

会談後の即席記者会見で、マハティール首相は「教皇とは、主に東南アジアとマレーシアについて、マレーシアがいかに進歩しているかを話し合った」と述べた<sup>19</sup>。次いで「パレスチナとイスラエルの対立問題の解決には、第三者の仲介が

---

<sup>15</sup> 2001年9月14日アメリカ合衆国で共同発表された「カトリック司教団とイスラム教指導者の合意による声明」。

<sup>16</sup> Bernama, 6 June, 2002.

<sup>17</sup> カトリック代表として、サラワク出身のエネルギー通信マルティメディア大臣 Datuk Amar Leo Moggie とサバ出身の総理府大臣 Tan Sri Bernard Dompok に加え、マレーシア・ファトリ評議会議長の Datuk Dr. Ismail Ibrahim と宗教説教者 Uthman Muhamadi 氏の4人で構成されていた(Bernama, 7 June, 2002)。スター紙報道は、駐イタリア・マレーシア大使 Datuk Shamsudin Abdullah も加えている(The Star, 8 June, 2002)。

<sup>18</sup> Catholic Asian News, July 2002, p.3, The Star, 8 June, 2002.

<sup>19</sup> ibid., p.3.

必要なこと」と「交渉によるテロの終結を必要とし、テロの根源を除去すること」という点で、教皇と見解の一致をみた、とした<sup>20</sup>。さらに「マレーシアで信教の自由が守られている状況に、ヴァチカン側は極めて満足しているようだ」とも語った<sup>21</sup>。一方、ヴァチカン報道官副長 **Ciro Benedettini**, C.P.司祭によれば、議題としたのは「マレーシアでの教会と国家の現状」と「イスラームとキリスト教の文化的つながりに焦点を当てた対話促進の方法」についてであったという<sup>22</sup>。また、かつてマレーシアを訪れたことがあると言って首相を驚かせ、マレーシアのカトリック信者達に会う希望を伝えたヨハネ・パウロ二世に対し<sup>23</sup>、返礼としてマレーシアに招待するかどうかについて首相は明言を避け、「教皇は(高齢かつ病身のため)、招待に応じるとは思わない」と答えた<sup>24</sup>。さらに、ヴァチカンとの外交樹立の件については、教皇庁側から要求されなかったとのことである<sup>25</sup>。前面に出したのは「ほとんどのパレスチナ人がムスリムなので、世界中のムスリムから同情が多く寄せられていること」だった<sup>26</sup>。

真相は藪の中だが、双方の発言に偽りが無いとすれば、立場の相違から、交わされた会話の

<sup>20</sup> *ibid.*, p.3, Bernama, 7 June, 2002, The Star, 8 June, 2002.

<sup>21</sup> *ibid.*, p.3.

<sup>22</sup> *ibid.*, p.3, Vatican Information Service, 7 June, 2002.

<sup>23</sup> The Star, 8 June, 2002.

<sup>24</sup> Catholic Asian News, July 2002, p.3, Bernama, 7 June, 2002, The Star, 8 June, 2002.

<sup>25</sup> Bernama, 7 June, 2002, The Star, 8 June, 2002.

<sup>26</sup> Catholic Asian News, July 2002, p.3, Bernama, 7 June, 2002, The Star, 8 June, 2002,.

中で互いに関心の焦点が異なっていたと解釈するのが妥当だろう。すなわち、全世界の約 10 億 4 千万人<sup>27</sup>に及ぶカトリック信者の総責任者である教皇が、中東情勢もさることながら、同時にマレーシアとカトリック共同体の実情を気にかけたのに対し、「穏健中道なイスラーム国マレーシアの模範的ムスリム指導者」を自認ないしは追認する首相が、パレスチナ問題やテロ問題に関連してムスリムが被っている不利益を訴え出たという形である。

マハティール首相は、ミケランジェロのシステナ聖堂を見物した後、ローマのイスラム文化センター内モスクで金曜礼拝をしたという<sup>28</sup>。

#### 筆者が得たカトリック側の反応

2002 年 8 月 15 日、言語問題リサーチの用件で、クアラルンプール市内の Bukit Nanas にあるカトリック大司教館を訪れた筆者は、インド系男性研究員(元マラヤ大学地質学部助手)から、本件にまつわるカトリック側の反応を、派生的に聞くことができた。

まず、筆者がネット記事で奇妙に感じたように、この件で大騒ぎしていたのはマレー人の方であったという。また、大司教は当時不在だったので、首相のヴァチカン訪問にあたってプロトコルなどの説明を担当したのは、大司教補佐役の司教 Rt. Rev. Murphy Nicholas Xavier Pakiam であったとのことである<sup>29</sup>。さらに、「実はアラブ諸国

<sup>27</sup> バチカン年鑑『アヌアリオ・ポンティフィシオ』2001 年版より。日本国外務省は約 9 億 5 千万人と計上する。

<sup>28</sup> Catholic Asian News, July 2002, p.3, Bernama, 7 June, 2002, The Star, 8 June, 2002.

<sup>29</sup> 筆者はこのタミル系司教に二度面会したことがある(2000 年 12 月 5 日と 2001 年 8 月 13 日)。いずれも、

の 99%がヴァチカンと外交関係を結んでいて、しかも良好な関係にある。何もマレーシアだけがイスラーム圏で初のヴァチカン招待であったわけではない。そのことをマレー人はどの程度わかっているのだろうか」と語った点が、最も筆者の印象に残った<sup>30</sup>。

実のところ、故トウク・アブドゥル・ラーマン氏も 1970 年代に前々教皇パウロ六世(在位 1963-1978)を訪問した過去があるようだ。しかしそれは、マレーシア首相としてではなく、サウジアラビアのファイサル王に頼まれて就任したイスラーム連帯会議事務総長としてであった<sup>31</sup>。

興味深いことに、マハティール首相のヴァチカン訪問後の 6 月 10 日、インドネシアのメガワティ・スカルノプトリ大統領も初めてヴァチカンを訪れ

たという<sup>32</sup>。これは、ローマで開催された世界食糧サミット出席との兼ね合いらしい。教皇は“Selamat Datang”とインドネシア語で挨拶して出迎え、英語で行われた 10 分間の私的懇談中「インドネシアに神の祝福があらんことを」と二度述べるなど、マレーシアよりもインドネシア情勢に強い関心を示したとのことである<sup>33</sup>。

その他、カトリックメディアは、教皇が以前、イランのハタミ大統領を招いたこと、パレスチナのアラファト氏が一度ならずヴァチカンを訪れ、教皇もエルサレム北部のラマラへ赴いた事実に言及している<sup>34</sup>。

#### まとめ

この一連の出来事は、マレーシア国内において、対話の不足による宗教コミュニティ間のギャップが歴然としていることを物語っているといえそうである。もし指導者レベルでの諸宗教間対話が日頃から積み重ねられていたならば、本件のような「すわー大事」という時にでも、これほど大仰に騒ぐこともなかっただろうし、これをきっかけに、

---

偶然出会ったという形であり、部屋に招き入れられて、15-30 分ほど雑談めいた話をした。ペナンにあるカトリック大神学校コレッジ・ジェネラルの元校長である。

<sup>30</sup> 民主行動党(DAP)の林吉祥(Lim Kit Siang)党首が、これに類似した意見をホームページで公表している。「法王聖座は 172 ヶ国と公式外交関係を持っており、その中には、イラン、イラク、エジプト、ヨルダン、バーレーン、リビア、モロッコ、イエメン、トルコ、パキスタン、クウェートなどイスラーム諸国も含まれている。アジアでは、日本、韓国、インド、インドネシア、フィリピン、タイ、シンガポールと外交関係がある。」「教皇としての 24 年間のうち、ヨハネ・パウロ二世は、25 のムスリム諸国を含む 115 ヶ国以上を訪れた。」これを根拠に、ヴァチカンとマレーシアの将来的な外交樹立に向けて、教皇をマレーシアに招待するよう提案している(Media Statement, 3 June, 2002, “Invite Pope John Paul to visit Malaysia”)。また翌日には、ムスリム代表と共に MCCBCHS 代表を随行させるよう意見している(Media Statement, 4 June, 2002, “Inter-religious delegation should accompany Mahathir on Vatican visit”)。なお、林吉祥氏はカトリック信者ではないとのことである。

<sup>31</sup> Catholic Asian News, July 2002, p.4.

---

<sup>32</sup> *ibid.*, p.29.

<sup>33</sup> この背景には、1989 年に教皇がインドネシアを訪問していたこと、今回メガワティ大統領が教皇へのお土産にジャカルタ大聖堂の油絵を贈ったこと、アンボンやマルク諸島でクリスチャンとムスリムの緊張が高まっている近況などが考えられる。

<sup>34</sup> Catholic Asian News, July 2002, p.4. アラファト氏夫人が、自分の子どもを教皇に祝福してもらったエピソードも紹介されている。(注：当誌では‘Palestinian Authority leader Yasser Arafat’としているが、パレスチナ、イスラエル、アラブ諸国、アメリカ合衆国、イギリス、フランス、トルコ、日本では、諸政府とジャーナリズムとの間で地位称号が「大統領」「長官」「議長」「指導者」「代表」と不定である。当該地域の複雑な現状を鑑み、本稿では一般敬称にとどめる。)

国内のカトリック共同体とムスリム共同体に長年横たわる懸案事項解決への橋渡しも期待できたはずである。しかし部外者である筆者の目には、相互理解に向けての貴重なチャンスを、ムスリム指導者側はみすみす逃しているのではないだろうかと映る。対外的に体裁を整えることに専念する傾向が、訪問前のお祭り騒ぎにのみエネルギーを費やし、訪問終了後は、また元の鞘に戻ってムスリム間の論争に終始している様相を、とても残念に思うのである。

私見では、マレーシア社会におけるキリスト教(この場合はカトリック)への対応には、国内向けと対外向けの二重基準が存在するように思われる。

国内向けとしては、ムスリムと非ムスリムとを線引きし、国策や行政の大半は前者に有利な働きかけがなされる傾向にある。礼拝施設問題ばかり、墓地問題ばかり、である。また、ここ二十年来、非イスラーム諸宗教が主催する宗教間対話のセミナーに招待されても、参加を渋ってきたのはムスリム側なのである<sup>35</sup>。他方、多宗教社会でありながらも、マレーシアでは人々が安寧と融和のうちに暮らしていることを対外的にアピールする意図から、クリスマスのオープンハウスなど記念行事は、大々的にムスリム指導者が範を示す。これは、各国外交官や外国人観光客が集中する都市で目立つ催しである。今回のヴァチカン訪問も、その一変種といえなくもない。

「歴史的な会談」と鳴り物入りで報道されたものの、本件に関するカトリック側の醒めた反応は、半ば当然の帰結であった。

<sup>35</sup> ただし、個人レベルでの交流やムスリムによるキリスト教理解の試みも、限定的とはいえ、ないわけではない。

(参考資料)

Bernama (Online): <http://www.bernama.com/>

The Star Online: <http://thestar.com.my/>

Utusan Malaysia Online: <http://www.utusan.com.my/>

Asia Times (『亞洲時報』) Online, Hong Kong: <http://www.atimes.com/>

Lim Kit Siang Homepage: <http://www.malaysia.net/dap/>

Vatican Information Service: Ufficio Generale: <http://www.cin.org/>

Catholic Asian News, July 2002 (Vol.31 No.7)

『テロと報復への視点』カトリック社会問題研究所編 2001年11月30日フリープレス刊

日本国外務省ホームページ: <http://www.mofa.go.jp/mofaj/>

謝 辞

本稿を作成するにあたり、駐日ローマ法王庁大使館(千代田区三番町)から、現在ヴァチカンが正式外交を樹立している174ヶ国のうち、特にアラブ諸国などのイスラーム圏に関して、懇切丁寧に教えていただいた(2003年1月27日文書回答)。この場を拝借して、厚く御礼申し上げる。

2003年1月31日記 3月24日追記